

私の行動に出会うために — 二人称的現実と意のままにならない物質から始まる認知科学 —

Encountering My Own Behavior: Cognitive Science of Second Person Reality and Intractable Materiality

高梨 克也
Katsuya Takanashi

京都大学
Kyoto University
takanasi@sap.ist.i.kyoto-u.ac.jp

Abstract

Uncertainty in agent's actions is an inevitable fact. This uncertainty arises from two aspects of externality. On the one hand, meaning of an action by an agent must be constructed on second person viewpoint relative to other's understanding and response. On the other, a bodily behavior must be conducted in the not fully predictable material world. This article is an attempt for laying out a direction in cognitive science built on an agent's experiences of "encountering his/her own behaviors" triggered by the externality.

Keywords — Action, Experience, Externality, Second Person Reality, Intractable Materiality

1. 背景：フィールドインタラクショナル分析

本発表者は近年、人々の日常的な相互行為を対象として、「フィールドインタラクショナル分析」(高梨近刊)という新たな方向性を提示する試みを進めている。その動機となっているのは、相互行為が行われている社会的・物質的環境の複雑さを、統制・限定せずに、参与者にとっての価値の観点から把握したいという願いである。実社会において人間が行っている相互行為という活動について、当事者たちの認知や関心からかけ離れた視点からの研究を行うことには、研究成果の社会的意義の面だけでなく、科学的事実の解明の営みという意味でも、重要な歪みや欠落があるのではないかと考えている。

一般に、フィールド研究は、実験室内に閉じ込めることの難しい複雑な社会的・物質的環境について理解するのに有効な方向性である。ここで「方法論」と呼ばず、あえて「方向性」という表現を選択したのは、フィールド研究は多くの場合、より確立された既存の方法論のもつ何らかの限界を超えていくことを目指して行われるからである。そこに限界や問題があると認識していないならば、フィールド研究という不確かであるにもかかわらず膨大な労力が必要となるアプロー

チを選択する理由はない。本学会でも近年提唱されている「フィールド認知科学」(伝他 2015)のように、特に「認知」という、従来実験室実験などによって研究されてきた現象や領域を対象とする場合、このような「批判に基づく乗り越え」という動機は重要であると考えられる。

上記の社会的・物質的環境の複雑さといった要因は、中心的（であると研究者が考える）認知能力の解明にとっては、できることなら統制もしくは排除したい「周縁」的要素であると思なされることが多かった。しかし、もし「周縁」だと思われていた現象こそがわれわれの認知的パフォーマンスにとって必須のものであったり、さらには、それらこそがわれわれが認知能力を駆動する原動力であったとしたら、この排除の構図は成り立たなくなる。こうした強い主張をするのではなく、少なくとも、従来「統制したいが難しい」と考えられてきた要因の方こそがまさに研究上「知りたいこと」である場合には、既存の中心一周縁という構図が挑戦されなければならないものとなることは確かであろう。

フィールドインタラクショナル分析においては、主体の認知および行動を考える際、次の二つの「外部性」が必須のものであると考えられる。まず、社会的環境の複雑さに関しては、自身の行為・振る舞いの意味は他者（第一義には相互行為の相手）によって解釈されることによって初めて論じうる社会的事実となるということ。次に、物質的環境の複雑さに関しては、環境内の対象物との関わりは、やってみる前に予測できる側面とやってみて始めて分かる側面との間の対話であり、一方を他方に還元することはできないということ。そして、これらの二つの外部性は、日常生活環境においては、ウェイトの置かれ方こそ異なれ、自己—他者—環境の三項関係の形で相互に浸透しあっている。

2. 主張：私の行動に出会う

本 OS の目的は「生きる」と向きあう科学としての認知科学のあり方を模索することである。この目的にとって、次の Dewey の言葉を重要な出発点となる。

「理性」は偽りの単純性、斉一性、普遍性を仮定するものであり、科学のために架空の安易な道を開くものである。この道は、知的な無責任と怠慢とを生む。無責任というのは、合理主義が、理性の諸概念は自足的且つ超経験的であるがゆえに、経験による確認は不必要であり不可能である、と主張するからである。怠慢というのは、この同じ主張が人間を具体的な観察や実験に対して無関心たらしめるからである。(Dewey, 1920, 邦訳 pp.88-89)

行動を扱う多くの通常科学においては第三者である分析者がその行動の意味を外在的に定義づけていたのに対して（これが「客観的」と呼ばれる）、本発表の主張は「私は私の行動に出会わなければならない」というものである。これは、Dewey の言葉を借りれば、行動に主体の「経験」の次元を取り戻す試みであるといえる。

Reed(1996a)は、Dewey のいう意味での「経験」を重視し、これが現代社会におけるさまざまな側面において軽視されていることに警鐘を鳴らしている。

経験のこの再生がないかぎり、われわれは空虚な確実性と感覚の無意味な断片の間で揺れ動かざるをえない。…生きているということは、危険を享受し、間違いから学ぶことである。ところが、大半の制度はわれわれに対して日常における危険も間違いも認めていない。(Reed, 1996a, 邦訳 p.97)

現代社会におけるこうした傾向の原因として、Reed はデカルト以来の近代哲学がもつ「不確実性への恐怖」という傾向を指摘しているが、この傾向は「客観性」という基準に過度に志向する現代通常科学に伴う常識的価値観にそのまま引き継がれているといえるだろう¹。これに対して、Peirce から Dewey を経て Mead に至るプラグマティズム、特にその核心である探究の論理においては、意外な出来事への着目やアブダクションの概念などに端的に現れているように、不確実性を認め、これを肯定的に捉え直すことにその特徴がある

¹ 「不確実性への恐怖」という指摘が当てはまるのは、科学哲学における厳密な議論のレベルにおいてというよりも、通常科学に携わっている多くの平均的な研究者や科学を過信する一般市民の水準においてであろう。その意味で、この指摘は科学社会学的なものであると理解していただきたい。

(魚津 2006, 笠松・江川 2002 など)。

もちろん、行動を主体の「経験」の観点から捉え直すということは、行動主体が自身の行動の意味を知っている、自身でその意味を決定できるというナイーブな独我論的主張ではありえない。そのことは Dewey の次の言葉からも明らかだろう。

有機体は、自分の構造—単純であれ、複雑であれ—に応じた方法で環境に働きかけるものである。その結果、環境に生じた変化が、有機体とその活動とに反作用する。こうして、生物は、自分の行動が生んだ結果に出会い、その結果を受ける。この能動と受動との密接な結合が、経験と呼ばれるものを形作っているのである。

(Dewey, 1920, 邦訳 pp.78-79, 傍点は著者による)

上記で、行動主体自身でさえ、自分の行動に「会う」必要があるとしていたのはこうした理由による。すなわち、行動主体が自身の行動の意味を知る（経験する）には、自身にとって全面的には把握・制御できない「環境」との相互作用が不可欠なのである。

行動主体が自身の行動を経験する最も端的な契機は行動の「失敗」であろう。次の引用は、行為の失敗こそが行為者が自身の行為に「会う」ための重要な契機としての積極的な価値を持つという考え方を端的に示している。

意識的要素としての感覚は、既に始められている行為のコースが中断されることを意味する。…感覚は、今までの適応が中断されたことから生ずる変化のショックなのである。…感覚は、行動の再適応の中心点として働く。…感覚は、やがて認識に終わるべき探究行為への挑戦であり、刺戟であり、挑戦である。

(Dewey, 1920, 邦訳 pp.80-82)

そこで、本稿においても、行為主体を取り巻く不確実性について、失敗の積極的な価値を評価する立場から考察していくことにする。ポイントは、不確実性が不可避であることを認めることと、不確実性に恐怖しない方法を発見すること、の2点であるが、とはいえ、これは日常生活者が普通に行っていることの再発見に過ぎない。

なお、上記の引用において Dewey は「環境」と一括りにしているが、本稿ではこれを「他者」と（それ以外の）「環境」の二つに便宜的に分けて考察していく。まず、第3節では、「他者」の役割については、「自分の発話の意味は自分で決められる」というナイーブな

先入観²に対する会話分析などを中心とした立場からの批判について振り返る。同時に、この視点は「発話の意味は第三者が客観的に認定すべきものである」という科学主義的な立場への批判ともなる。次に、「環境」の役割については、「自分の身体的行動は自分だけで自己完結的に制御できている」というナイーブな制御感覚がターゲットになるだろう（第4節）。これに対しては、主に生態心理学の観点から、行為の失敗の不可避免性と不可欠性という観点での考察を行う。

3. 観点1：発話の意味という二人称的現実

3.1 連鎖分析

話し手の発話の意味は言葉の字義通りの意味によって常に一意に決まるわけではない。語用論は長年この問題の解決に取り組んできたが、おそらくは上述の「不確実性への恐怖」により、結果としてその議論は泥沼状態に陥っていたとも言える。一言で言うならば、そこになかったのは聞き手との共同行為という発想であり、こうした共同行為を捉えるための方法論であった（Clark, 1996）。こうした方向性を厳密な方法論として定式化することにこれまで最も成功してきたのは会話分析における「連鎖分析」（Schegloff, 2007）である。これは、聞き手が話し手の発話をどのように理解したかは聞き手の次の発話（応答）に観察可能な仕方に表示される、なので、話し手の発話を分析する分析者もこうした聞き手の応答を分析の際に最重要視しなければならない、という考え方だと要約できるだろう。

連鎖分析の考え方が最も端的に分かるのは、会話における誤解の修復の例であろう。次例において、T2のBの反応からAが気づくことができるのは、BがT1を先行告知（ニュース告知の前置き）と理解したのだろうということ、そして純粋に（情報を求める）質問をしようとしていたAとしては「誤解された」ということだろう。

【事例1】

T1 A：明日誰が来るか知ってる？

T2 B：誰誰？

T3 A：知らないのよ。

T4 B：ああ。林先生じゃないかなあ。

このように、「聞き手の応答（T2）は直前の話し手の発話（T1）に対する理解を表示する」ということは、裏を返せば、T1の発話の話し手にとって、聞き手がこのT1を誤解したことが明らかになるのもT2の発話においてだ、ということでもある（Schegloff 1992）。つまり、話し手の発話の意味は聞き手だけが一方的に決められるものであるわけではない。

連鎖分析の考え方に含まれている思想は、まずは話し手の発話の意味を決めるのが「他者」である聞き手だということだが、それだけだと、文学理論における受容理論の流れが「何でもあり」の解釈主義に陥っていったのと同じ危険もあるように見えるかもしれない（Selden, 1985）。そこで重要なのが、聞き手の理解が聞き手の頭の中にあるのではなく、応答やその他の振る舞いとして、元の話し手にとって観察可能な仕方で見れる、という点である。本稿の文脈に照らして再解釈するならば、これによって、話し手が自身の発話の意味に「出会う」ことが可能になっているという点が重要である。「話し手の一人称」から単に「聞き手の一人称」へと移行するのではなく、両者の間の意味の共同構築（ある場合には協議や争いも含む）のプロセスをも含みこんでいるという意味で、このアプローチは発話・行為の意味に対する真に「二人称」的なものであるといえる。

加えて、上記の「聞き手が話し手の発話をどのように理解したかは聞き手の次の発話（応答）に観察可能な仕方に表示される」という考え方には、これらの表示とその過程が会話参与者同士の間だけでなく、第三者である観察者にも利用できる情報となっているということもまた含まれている。そのため、発話の意味を観察者は外部観測的にしか測定できないというある種の悲観論を軽減し、第三者が参与者にとっての意味に接近する道を拓く考え方ともなっている。

以上の流れは、客観主義的三人称視点とこれを批判する（反動としての）主観主義とをともに超え、二人称視点とこれを経由した新しいタイプの三人称視点とに向かう方向性を示しているといえるだろう。

3.2 遡及的連鎖

その一方で、現時点での連鎖分析の手法にはまだ必ずしも完成品であるとはいえない点もある。

² デリダ(2005)が批判する「現前の形而上学」の典型はこのような「私が話すのを聞く」という視点である。

【事例2】

- 01 A : どこ? 高校
 02 C : 高校? 高校は江戸川: 東ってゆうこれまた
 これ [またマイナーなうん
 03 A : [あ, そうなんや:
 04 C : 公立公立 [:
 05 B : [へ [:
 06 A : [へ: . K 大来た人おった?
 07 C : K 大来た人六人かな [: 【評価対象】
 08 A : [六人 [もおるん
 【第一評価】
 09 B : [へ:
 10 C : うん六人, 多いんかな [: 【第二評価】
 11 A : [多いよ [:
 12 C : [なんか私
 : 少ない [とか思っと思ったけど
 13 A : [いや, うちあたしだけやも: ん

8A の「第一評価」と 10C の「第二評価」の間の関係は評価連鎖 (Pomeranz, 1984) と呼ばれるものである。これだけならば、連鎖分析の基本となる隣接ペア (Schegloff, 2007) と類似のものである。しかし、本稿の観点から重要なのはそのことではない。重要なのは、8A の第一評価では、直前の 7C で示された「K 大学に合格した人が 6 人だった」という事実に対して A が驚いており、そのためこの事実を「評価を示すべき対象 assessable」(Goodwin & Goodwin, 1987) として捉えているという点である。人によってはこの事実に対してここでことさらに評価を示さないこともありうるだろうという点からは、7C が評価対象としての地位を獲得するのは直後の 8A がこれをそのように扱ったからだということになる。このように、評価連鎖における第一評価の中には、直前の発話を評価対象として遡及的にハイライトする (Schegloff (2007) のいう遡及的連鎖) という役割をもったものもあることが分かる (高梨 2010, 2016)。

このことを C の立場から捉え直してみよう。本稿の観点から重要なのは、7C で「K 大来た人六人かな」と回答した C は「6 人」が「多い」とは考えていないため、これに驚きを示した A の反応に対して驚くことになるだろう、という点である。つまり、C は A からの反応を受けて自身の発話に含まれていたある側面に「出会う」のである。Mead (1934) は、自分の発した身振り、それが招く相手からの反応、結果として進行する相互行為、の 3 つの間の関係から「意味」が形作られてくると考えている (徳川 (2002) も参照)。この点は相互行為の中のあらゆる発話や身振りに共通して当てはまるものだが、遡及的連鎖は特にこの「出会い」の

側面がきわめて端的に現れた現象であるといえる。そして、この点は、有名な Mead (1934) の自己論が Me と I とのある意味では「出会い」という着想を核としていたこととも対応している。このようにして、発話者である私は発話という自身の行為を「経験」することが可能になる。

3.3 二者関係から三項関係へ

Goodwin & Goodwin (1987) は、評価連鎖の中で各参与者の表明する態度が異なりうるのは両者の間で評価対象についての経験やアクセスが異なるためだと指摘している (図 1)。結果として、二人の参与者と一つの対象物を含む、価値判断を伴った関係は、乳児と養育者の間での原初的コミュニケーションとして重要な「共同注意」の場面と同様の構造の三項関係となる (高梨 2016)。

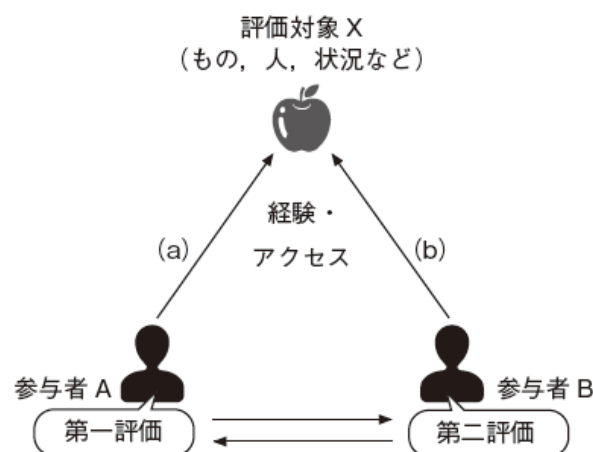


図 1 三項関係図式

4. 観点 2 : 意のままにならない環境

4.1 身体行動の失敗

「私が私の行動に出会う」ための契機は「他者」だけではない。「環境」やその中での自身の行動が「意のままにならない」側面を持っているということもその契機の一つとなる。第 2 節の最後で述べたように、私の行動は事前に計算済みの「確実」な世界の中で行われるわけではない。私の行動はその中で環境と出会い (Reed, 1996b), また、この出会いを通じて、私は私の行動に出会うことが可能になる。

不確実性が避けられない環境と関わる身体行動はしばしば失敗する。失敗の頻度や失敗による損害を小さくしようとすることは日常生活者にも当然見られる傾向だが、こうした不確実性をゼロにしようとするこ

とは第2節で述べたような意味で不健全な志向である。むしろ、行為者が失敗を通じて環境および自身の行為について何を学んでいるかという点を積極的に評価する方が実り多い発見があるのではないだろうか。

しばしば見落とされがちであるように思われるのだが、環境や対象物の持つ「アフォーダンス」といっても、そこには、A. やってみる前に分かる側面とB. やってみなければ分からない側面の少なくとも二つがあるはずである³。例えば、ある椅子が座ることをアフォードしているという表現には、当該の対象物がその形状や大きさ、(見た目の)材質において「座れそうに見える」という知覚を表しているといえるだろうが、これは「座っても絶対に大丈夫」ということが保障されているということではありえない。そして、AとBのずれの大きさは環境や動作の性質に応じて変化するだろう。

4.2 状況1：雪上での木遣り

ここで取り上げるのは野沢温泉村の道祖神祭のための準備作業場面である。この場面では二人の作業者が既に保管されていた材木の山の中から1本ずつを引き出し、横に並べていく作業をしている。材木は長さが2メートル以上で、垂直方向に半分に割られており、鳶口を使って引き出して運ぶ方法(木遣り)が選択される。各材木に対する作業は「曳出し」と「スライド」という2つのフェーズから構成され、各フェーズには連続する数回程度の運搬動作(ストローク)が含まれる。

【事例3】



図2 フェーズ1「曳出し」

³ 私自身もまだ正確に論じる準備ができていない点だが、これらの二つの側面を「二種類のアフォーダンス」と呼ぶのは、両者の間のつながりを見失わせる恐れがあるという意味で、おそらく正しくない。



図3 フェーズ2「スライド」

この作業に特徴的なのは失敗の多さである。前半の曳出しでは46回のストロークのうちの12回、後半のスライドでは40回のうちの7回で失敗が生じている。失敗の種類は力を込めた瞬間に鳶口の先が材木から抜けてしまう場合(「抜け」)と力を込めたが材木が動かなかった場合(「不動」)の二種類であった(高梨2017, 2018)。このように、「できそうだ」と判断して試みた身体行動が実際には失敗するということは当然のこととして起こりうる事態である⁴。

そして、一方で、込める力が大きくなるほど「抜け」が多くなるが、他方で、力が小さすぎると「不動」となりやすいというように、これら二種類の典型的な失敗の間にはトレードオフの関係がある。そのため、この作業において、作業者が志向していることは失敗を生じさせる不確実性を全面的かつ抜本的に消去することなどではありえない(もちろん失敗の可能性を可能な範囲内では軽減しようとはしているわけだが)。むしろ、彼らが実践していることは、「失敗」を契機として自身の行動に出会い、この経験に基づいて次のストロークを調整する、という学習のサイクルである。

こうした状況では、4.1節の表現を用いるならば、A) やってみる前に分かる点とB) やってみなければ分からない点とがずれていた、といえるだろう。そして、鳶口の抜けの場合、当該の行為者自身にとっては、鳶口が抜けたという事実は「鳶口の柄に込めた力に対する材木の重さによる抵抗の突然の消失」という触覚・身体運動感覚を通じて迅速かつ正確に経験されるであろう。材木の不動の場合、掛けた力のわりに材木が動いていないことが鳶口を通じての重量感や抵抗力として知覚されるはずである。こうした経験は本稿の前半で引用したDeweyの以下の議論と符牒する。

⁴ 特にこの作業において失敗が生じやすくなる原因や失敗の発生がある意味では不可避であるという点に関するより詳細な議論については高梨(2017, 2018)を参照されたい。

意識的要素としての感覚は、既に始められている行為のコースが中断されることを意味する。…感覚は、今までの適応が中断されたことから生ずる変化のショックなのである。…感覚は、行動の再適応の中心点として働く。…感覚は、やがて認識に終わるべき探究行為への挑戦であり、刺戟であり、挑戦である。(Dewey, 1920, 邦訳 pp.80-82)

このように、身体行動の失敗は、当該の行為主体自身にとって、それまで意識していなかった環境の諸特徴が意識される契機となると考えられる。Gibson (1966)は、行動をするための「遂行的」な運動ものと環境情報をピックアップするための「探索的」な運動とを区別しているが、この観点からは、身体行動の失敗は、遂行的だった運動の失敗によって、それまで意識化されていなかった、遂行に潜在的に伴っている環境「探索」という側面が顕在化する契機としての価値を持っていると考えられる。特に「触覚装置は、行為遂行の制御に溶け込んでいるので、私たちは、その知覚を生じさせる能力に、内観では気づかない。だから、私たちは、意識において視覚システムが優位を占めることを許している」(Gibson, 1966 ; 邦訳 p.155) が、行為の失敗はそれまで意識が向けられることの少なかった触覚・身体運動感覚モダリティにおける情報の重要性を行為主体自身にとって再認識させることになるだろう。

そして、このことは相互行為としての協同作業においても重要な意義を持っている。このような身体行動の失敗を契機とした知覚システムのモード変更によって新たな環境情報をもたらされるという経験をそれぞれの行為主体が有していることこそが、協働という相互行為における相互理解を支えるマルチモーダルな認知基盤として不可欠であると考えられるのである。

4.3 状況2：サッカーにおける1タッチ目

プロスポーツの選手であっても、当然プレーに失敗することはある。サッカーにおいては、一人のボール保持選手が1回以上のボールタッチを連続して行う

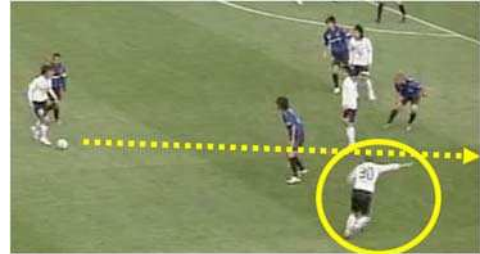
「ボール保持区間」(高梨 2015)が観察されるが、失敗という観点からは、当該のボール保持区間における1タッチ目は2タッチ目以降とは区別すべきであると考えられる。2タッチ目以降は直前で自身が行ったボールタッチから続く継続的なボール操作の行動連鎖の中にあるため、自身のボールタッチの身体的記憶の刻印を引き継いでいるのに対して、1タッチ目は直前ま

では自身が操作していなかったボールを(当該のボール保持区間内において)初めて操作し始めるものであるため、動いているボールの速度や回転などについての身体的記憶を照合できず、そのため失敗も多くならざるを得ないためである。そこで、今回はボール保持区間の最初のボールタッチ(通常はトラップ、1タッチだけの場合はパス、シュート、クリアなどのキック)に着目することにする。

小野伸二選手(S30)が歴代の日本のサッカー選手の中でもトップレベルの優れたボールコントロール技術を持つことは多くの識者の見解の一致するところだと思われるが、そういった選手でも当然失敗はする。

【事例4】

[1] S30(丸印)が右コーナー付近の広大な空きスペースを見つけ、そこへのパスを要求する(点線矢印)。



[2] パスが出されたので、ダイレクトでクロスを上げるためのボールと自身の到達位置(点線丸印)を予測しながら走り込む。



[3] 軸足を踏み込みはじめてから、予想よりもボールが長かった(速かった)ことに気づくが、バランスを失い(⇒)、転倒する。

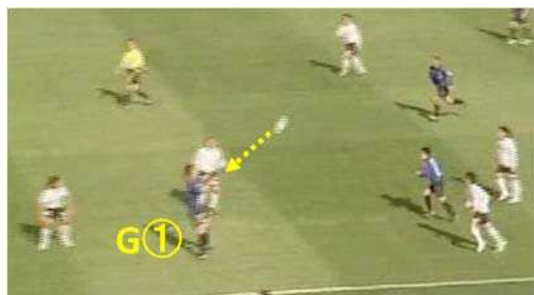


このプレーでは、ボールの到達とキックのための準備動作との間にごくわずかな時空間的なずれが生じて

いる。その結果として、バランスを崩して最終的に転倒していることから、これが「失敗」であることが誰の目にも明らかである。これに対して、次の事例においては何を「失敗」とすべきかは必ずしも自明でない。

【事例 5】

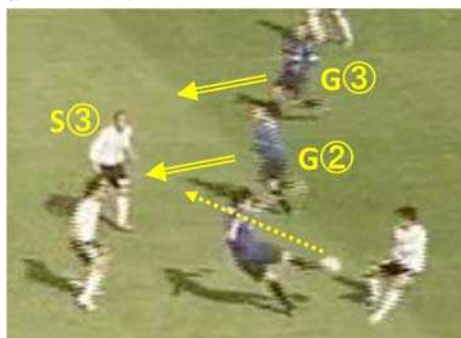
- [1] G①が後方からのスローインを胸でトラップしようとする。



- [2] このトラップがごくわずかに大きくなったのを見て、敵選手 S①と②がすかさず接近を開始する。



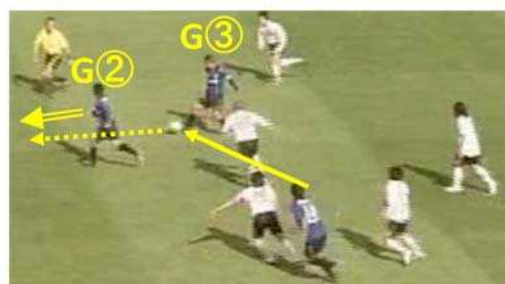
- [3] わずかの差で G①の方が S②よりも早く足が届き、ボレーで横パスする。この時、既に G②と③は縦に走り出している。



- [4] このパスは S③の目の前 (G②の背後) を通り抜け、G③に到達する。



- [5] G③が前方に走り出していた G②へダイレクトでパスし、カウンター攻撃へ移行する。



[2]において、敵選手 S①と S②がボールへのアクセス（関根・高梨 2012）を速めたのは、G①の胸トラップにわずかな失敗が含まれていたことに気づいたことによるだろう。サッカーにおいては、各選手のプレーはボールへの予測到達時間（高梨 2015）にきわめて感応的であるため、こうした瞬時の反応は自然なものである。一方、ここでの「行為主体」である G①についてはどうであろうか。G①自身も自らのトラップにごくわずかながら失敗が含まれていたことにすぐに気づいたと思われる（後述）。しかし、ここでの一連のプレーの流れを見ると、この若干失敗したトラップが敵選手を引きつけたことが、結果として G①→G③→G②という流れでのカウンター攻撃の起点となったということのも事実である。つまり、より大局的な視点から言えば、この最初のトラップは攻撃側チームにとって望ましい結果をもたらしている。

さて、ここが研究上の分かれ目である。今回本稿では、この最初のトラップを肯定的に評価するのではなく、あくまでも（少なくとも一旦は）「失敗」と記述する立場をとる。

まず、当該のトラップについて観察できる事実として、行為主体 G①は自身のトラップの直後に、このトラップに対する（後述の意味での）「リアクション」として、複数回の細かいステップを通じて、重心を後ろから前へと素早く移動させることによって（[2]の白抜き矢印）、浮いているボールに右足を大きく伸ばしている。結果として、G①の方が S②よりも先にボールに触れているが、サッカー経験者などが注意深く見れば、このプレーには「焦り」が観察できるはずである。

次に、このことをより抽象化するならば、まず、スポーツのプレーにおいても、また、日常的なさまざまな身体行動においても、行為者は複数の動作からなる系列（連鎖）に関するプランを何らかの形で持ってい

るであろう⁵。そのため、流暢な行動において、行為者は自身の個々の直前の動作に対して意識化可能なレベルでそのつど「リアクション」しているとは考えない方がよい⁶。これは従来の認知科学においても行為の「自動化」と呼ばれてきた一般的な事実である。この観点から言えば、逆に「失敗」という現象は、当該行為主体が自らの行為の予測された結果を流暢な動作系列と照合しつつ知覚することによって、この失敗によって新たに生じた環境に対して「リアクション」をとっているもの、と規定できるだろう。このように、失敗は本人に速やかに「気づかれる」可能性を持っているという点が重要である⁷。

これに対して、望ましい結果を生んだという点を肯定的に評価する上記の大局的な視点は、第1節で述べた意味で三人称的かつ事後的なものであり、この視点では、ここで見てきたような、プレーする行為者自身の知覚と行為のリアルを捉えられていないといえるだろう。

5. 議論：失敗が創発させるもの

これまでの事例とその要点を振り返ってみよう。

まず、事例2の評価連鎖においては、元の話し手Cは「他者」であるAからの応答を手かがりとして自身の発話に潜在していた側面を発見している。事例3の木遣りでは、各行為者は鳶口の「抜け」や材木の「不動」といった失敗を契機として、自身の身体行動とそこに含まれる環境の特性を経験している。同様に、サッカーにおけるトラップの失敗の事例5においても、行為主体は自身のトラップの結果を知覚し、これに対する「リアクション」を開始している。それぞれの事例における行為者にとっての不確定要素は事例2は「他者」、事例3と5では対象物などの物理的な「環境」というように異なっているが、反面で、予測とは異なる結果という意味での「失敗」が自身の行為に「出

る」契機となっているという点では共通しているといえるだろう。「学習」という観点からは、このような「経験」が行為主体をさらなる「探究」(Dewey)や「探索」(Gibson)へと導くという点が重要であろう。

相互行為という観点からは、行為の失敗が相互行為の失敗に帰着すると考える必要がないという点が重要である。むしろ、上記のいずれの事例においても、行為の失敗が相互行為の展開を創発させている。事例2では、「K大来た人(が)六人」という事実がAとCとの間での判断の相違を相互に顕在させ、両者の間での協議の端緒となっている。事例3では、自身の身体行動の失敗の経験が同じ作業に従事する他者の失敗の理解可能性を開くことを通じて、より円滑な協同作業が可能となっていく。事例5では、トラップの失敗に反応した敵選手のアプローチがかろうじて不発に終わることによって、カウンター攻撃への端緒が開かれている。事例3と5は相互行為が協力的か競争的かという点では対照的だが、行為の失敗が相互行為の創発を促しているという点では共通している。

6. おわりに

私の行動には「他者」および「環境」という二つの方面での外部性が不可避なものとして伴っている。しかし、これらは行動の不確実性を生じさせる元凶として排除されるべきものなのではなく、むしろ、私の行動を支えることによって、私の経験を可能ならしめているものなのである。

逆に言えば、失敗の可能性のない「確実」な行動というものがたとえ可能だとしても、そこには学習の生まれる余地はない。さらに言うならば、行動の確実性が保障された環境という考え方は、行為主体にとっての学習の可能性自体を排除しているという意味で、そもそも発達や進化という事実と相容れないものであると見なされるべきものである。

謝辞 本研究は科研費基盤(B)「祭りの支度を通じた共同体〈心体知〉の集団学習メカニズムの解明」、科研費若手研究「成員カテゴリーを用いた会話の連鎖・参与構造の記述モデルの実証的研究」の補助により行われた。

参考文献

- [1] Clark, H. H.(1996) *Using Language*. Cambridge University Press.
- [2] 伝康晴・諏訪正樹・藤井晴行(2015)「特集「フィールド

⁵ 「何らかの形でプラン（あるいは「予測」）を持っている」ということはそれを「計算主義的に処理可能な表象の形で持っている」ということやその「プランの内容を行為者が意識している」といったことを自動的に意味するわけでは全くない。表象主義的なプランモデルに対する批判が(勢い余って)プランの存在自体までを否定しようとするのは、人間や動物の運動の流暢さを考慮するならば、非生産的な議論であろう。
⁶ ここで焦点としている現象は「マイクロスリップ」とは異なるものであると(少なくとも一旦は)考えている。マイクロスリップは行為者による(意識されざる)「調整」であり、そのため、re-action とは呼びにくいと考えられるためである。
⁷ 「焦りは禁物」という格言もあるが、アージ理論(戸田1992/2007)など、情動のもつ環境適応上の機能を重視する観点から言えば、当然ながら、「焦りは大切」でもある。

- に出た認知科学」編集にあたって」、『認知科学』, 22(1), 5-8.
- [3] デリダ, J. (2005) 『声と現象』, 林好雄 (訳), ちくま学芸文庫.
- [4] Dewey, J. (1920) *Reconstruction in Philosophy*. Henry Holt. (清水幾太郎・清水禮子 (訳), 『哲学の改造』, 岩波文庫)
- [5] Gibson, J. J. (1966) *The Senses Considered as Perceptual System*. Houghton Mifflin Company. (佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之 (訳), 『生態学的知覚システム: 感性をとらえなおす』, 東京大学出版会, 2011)
- [6] Goodwin, C., & Goodwin, M. H. (1987) Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPRA Papers in Pragmatics*, 1 (1), 1-54.
- [7] 笠松幸一・江川晃 (2002) 『プラグマティズムと記号論』, 勁草書房.
- [8] Mead, G. H., (1934) *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*. University of Chicago Press. (河村望 (訳), 『精神・自我・社会』, 人間の科学社, 1995)
- [9] Pomeranz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred / dispreferred turn shapes. In Atkinson, J. M., & Heritage, J. (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge University Press, 57-101.
- [10] Reed, E. S. (1996a) *The Necessity of Experience*. Yale University Press. (菅野盾樹 (訳), 『経験のための戦い: 情報の生態学から社会哲学へ』, 新曜社, 2010)
- [11] Reed, E. S. (1996b) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. (細田直哉 (訳), 『アフォーダンスの心理学: 生態心理学への道』, 新曜社, 2000)
- [12] Schegloff, E. A. (1992) Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97 (5), 1295-1345.
- [13] Schegloff, E. A. (2007) *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis: 1*. Cambridge University Press.
- [14] 関根和生・高梨克也 (2012) 「サッカーにおける守備側選手が攻撃側選手との時間的と空間的ズレを埋めるための手がかり」, 『認知科学』, 19(2): 244-248.
- [15] Selden, R. (1985) *A Reader's Guide to Contemporary Literary Theory*. Brighton: Harvester Press. (栗原裕 (訳), 『ガイドブック現代文学理論』, 大修館書店, 1989)
- [16] 高梨克也 (2010) 「インタラクションにおける偶有性と接続」, 木村大治・中村美知夫・高梨克也 (編著), 『インタラクションの境界と接続: サル・人・会話研究から』 昭和堂, 39-68.
- [17] 高梨克也 (2015) 「サッカーにおける間合いを記述するための基本概念」, JCSS SIG Maai, Vol. 2015, No. 1: 1-6.
- [18] 高梨克也 (2016) 『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』, ナカニシヤ出版.
- [19] 高梨克也 (2017) 「協働作業において相手の環境との関わり方を観察する一野沢温泉村道祖神祭りの準備における氷点下の木遣りの事例から」, 『日本認知科学会第34回大会発表論文集』, 573-580.
- [20] 高梨克也 (2018) 「瞬発的運動のジレンマ雪上での木遣りの事例分析から」, 第7回日本生態心理学会予稿集.
- [21] 高梨克也 (編著) (近刊) 『多職種チームで展示をつくる: 日本科学未来館「アナグラのうた」ができるまで』, シリーズ「フィールドインタラクション分析」(高梨克也監修), 第1巻, ひつじ書房.
- [22] 戸田正直 (1992/2007). 『感情: 人を動かしている適応プログラム』 (新装版). 東京大学出版会.
- [23] 徳川直人 (2002) 「相互行為論の端緒—ミードの社会観—」, 伊藤勇・徳川直人 (編), 『相互行為の社会心理学』, 北樹出版, 47-66.
- [24] 魚津郁夫 (2006) 『プラグマティズムの思想』, ちくま学芸文庫.